

十月にしては少し蒸し暑い秋の日、二十一名が参加した。恒例の『ハゼ釣り大会』が開催されたのだ。この大会、日頃からお世話になつていゝSさんの肝入で発足し、すでに十五年以上の歴史を持つ。会の歴史の中で、黎明期に尽力してくれた、故人Nさんを偲んで『雅仁杯』というトロフィーまでできた。私はいつの頃からか、幹事ということになつていた。

東京湾のハゼ釣りは、古く江戸時代から秋の風物詩として、庶民に親しまれてきた。近代に入つても人気は衰えずにいたが、太平洋戦争の勃発で衰退する。戦後、世の中が落ち着いてくると、再び出船も増えて、ハゼ釣りの人気が戻つた。しかし、高度成長期に入ると、排水垂れ流しの公害が発生し、変形ハゼまで出現、釣り人は減つていった。その後、下水道の整備が進み、河川や海の水質良化に伴い、出船も増え釣り人気が戻つてきた。こんな盛衰を繰り返して、平成時代の今、再び秋の風物詩として、定着してきたようだ。

ハゼは全世界に分布している。淡水から海水まで、あらゆるところで二一〇種以上が生息しているとのことだ。日本近海にも四〇〇種類ちかくいる。東京湾で普通に釣れるのは、その中の『マハゼ』である。一年から二年間生き、二〇センチくらいの大きさになる。長い距離は泳げず短い距離をチョンチョンと泳ぐ。運動能力の低い底生魚なのだ。色は砂底に合わせた保護色をしている。多くのハゼは肉食でゴカイなどを大きな口で食べる。釣り餌に貪欲に喰らいつくので、釣りとしては初心者向きで人気がある。何にでもガツガツと飛びつく人、またはそのような行動を『ダボハゼ』よぶほどだ。

昨年は、江戸川放水路の河口で釣つたが、釣果はいま一つ振るわなかつた。ここ数年来、ハゼは数が釣れなくなつてきた。乱獲が原因なのだろうか？今年はお台場付近で釣果が上がつていゝらしい。

浦安の釣宿Tに集合した太公望たちは、午前八時、旧江戸川から乗船し、一路お台場へと向かつた。船は板前を兼ねた無口な船頭が舵を操る。お馴染みの船頭である。今年の船上は例年になく華やいでいた。いつになく女性が多く参加している。

船が進む川の両岸では、多くの釣り人が糸を垂れていた。船のスクリーンが作り出した波は、岸辺までの水面をゆつくりと伝わってゆく。こんな、のどかな風景の中を船は河口へと下つて行った。

ハゼ釣りは仕掛けが簡単、装備も手軽で、だれにでも釣れる。釣り場に到着したら、すぐに釣り始められるように、仕掛の準備をする。糸の先に天秤と称された金具をつけ、そこに小さな鉛の重りと針を結べばできあがりだ。後から餌にする『ゴカイ』が配られる。古参の自称名人たちは、自慢の竿を数本持つてくる。初めての人は手軽な貸竿を使う。参加二年目の人は、たいてい自前の竿を手に入れて持つてくる。

船は河口を抜け東京湾に出た。湾内の波は穏やかで船酔いする人はまずいない。それに最近の酔止薬は良く効く。(大漁の期待)を乗せた船は潮風の中を、河口から三十分程走る。

釣り場に着き船足を弱め舳先を風上に向けると、船頭が、

「さあ、始めてください！」

開始の音が響くと、いっせいに糸を垂らす。

「なにこれー、きもちわるーい！」

「それを千切つて付けるんだよ、餌なんだから」



おどおどしている女性釣師。指にはきれいなマニキュアが。そんな騒ぎの中、船中最初の一匹目が釣れる。

「はいー釣れました。もうボウズは無いよ」

「こつちも釣れましたー」

「こつちはダブルー！」

あちこちで好調にハゼが釣れ始めた。

私も数匹釣ったが小休止。初めての参加者に釣り方を詳しく教え始めた。

「まず餌の頭を取ってしまふ。これをこんなふう針に付けて仕掛けを海に投げる。浮子は使わないので糸の感覚で釣るんだよ」

「どんな感覚なの？」

「手に、プルプルって感じかな」

「重りが下に着いたら糸はピンと張って待つんだよ」

多少納得して釣り糸を垂れていると、

「きたきた！」

「キュツと、少し糸を引張って合わせるんだよ」

「わかった」

最初は合わせ方もぎこちない。

「あーあ、何も釣れないよ」

「そうか、残念。でもほら餌が取られてるだろう。さあ、新しい餌を付けてもう一度。今度はもっとゆつくりと合わせてみな」

再び糸を垂らして海面を見つめていると、またも当たりがあつたようだ。ゆつくりと糸を上げた。

「あつ釣れた！釣れてる！」

大喜びでハゼを取り込むと、針が飲まれていた。

「釣れてよかったね。でも合わせが遅すぎるとほら、針が飲まれてるだろう。かしてみな、外してやるから」

大きな口に針抜きを差し込み、ぐりぐりと回しながら針を外す。そんなことを何度かやっている、もう一人で大丈夫。結構さまになってくる。

船の舳先では、こんな一コマが。

「うわー怖いよ！」

「どうしたの、Hちゃん？」

「餌を針に付けていたら、ゴカイと目が合った」

「そんな馬鹿な」

女性たちも結構器用に餌を付けて釣っていた。

そのうち、飲み物と摘みが回ってくる。洋上でのビールは旨い。気持ちが大らかになってくる。酒を飲みながら遠くを眺め、物思いに耽っている人もいた。しかし、ほとんどの人は、脇目も振らずに釣りに専念している。あちこちで次々に釣りあげている。上げ潮になり食いが立っているのだ。魚は潮が満ちてくる時に一番釣れる。初心者も五匹以上釣っていた。釣果が上がりだし、漁師たちは魚の取り込みにいそがしい。

潮風の中に、香ばしい油の匂いが流れてきた。船頭が天ぷらを揚げ始めたのだ。昼時になると、海を背にしてテーブルに向かい食事になる。最初に浦安名物、串刺しのアサリ焼が出る。これを

肴に酒を少々飲む。茶碗によそったご飯が回ってくる。香の物とアサリの味噌汁も順次回ってくる。そのうちに野菜の天ぷらが揚がってくると、これをおかずに食事が始まる。

私の隣に座っている若い初参加者に、

「Kくん、天ぷらは早く食べないと、すぐなくなるぜ」

「そうなんですか」

二人のやり取りを、ニコニコしながら見ている人もいる。波に揺られ、かなり空腹になっていたのだろう。Kくんは次々に野菜の天ぷらを、お腹に詰め込んでいた。

「ツネさん、あんまり食べないんですね」

「そのうちゆっくりとね」

野菜が終ると、今度はイカやメゴチの天ぷらが揚がってくる。

「Kくん、このメゴチは最高にうまいぞー。ほら食べるよ」

「たくさん出てきたなー。でも腹がいっぱいで、食べられないや」

最後にエビ天が揚がってくる。後から高価な旨い天ぷらが出てくるのだ。

「うまそうだけど、もう食べられないよ。ツネさんに急がされて……、騙された。悔しいー」  
みんなが笑っている。

そんな団らんが終わると、再び海の方を向いて釣りが始まる。午後の釣りはさまざまだ。一心に釣りをする名人タイプ、私のように適当に釣りとお酒を楽しんでいるタイプ、ほとんど海に背を向けて、お酒と船上会議を楽しんでいるタイプ。いずれも秋晴れの下、最高の休日に違いない。

根気強い名人たちのクローラーは、もういっぱいになっている。六十匹は優に超えているだろう。怠け者の私でも三十四匹以上は釣れている。それには理由がある。自前の竿にスピニングリールを付けて、仕掛けを遠方に投げて釣る。遠くから船の近くまで、ゆつくりと巻きながら当たりを取れるので、広い範囲で釣っていることになる。貸竿の場合、船の周辺でしか釣れない。ハゼ釣りが好きになって、二年目以降も参加する人が、自前の竿と仕掛けを持つてくる理由は、こんなところにある。それでも今回のハゼ釣りは、貸竿での初参加者も十五匹は釣っていた。

午後三時前後になると釣りをやめて急いで船着き場に戻る。秋の日暮れは、つるべ落とし。暗くなるのは早い。家に帰り、釣った魚を料理するには時間もかかるのだ。

船宿に戻ると、

「ハゼが七十六匹とスズキが三匹、今日は俺が竿頭かな。おまえは何匹釣った？」

「俺は五十八匹」

「俺は……」

「僕は……」

日に焼けた笑顔で、釣果を報告しあった。

釣り名人が言った。

「さあー帰って天ぷらを作るぞー」

「どうやって料理するんですか？」

「まず頭を切り落とす。腹から開いてワタと骨を取って天ぷらに揚げるんだ。小さいやつは、そのまま唐揚げでもいいんだ」

小さな魚ではあるが、ハゼは魚屋で売っていない。貴重な獲物でもある。

「お疲れさんでしたー」

身支度が整った順に、今日の獲物と釣宿からもらったアサリを手に、三々五々帰っていった。

釣宿の主人が、毎年土産にくれるこのアサリ、小粒ではあるがうまい。

みんなが帰り終ると、肝入役のSさんが私に言った。

「ツネさん、みんな楽しんでくれたし、今日のハゼは好調だったね」

「そうですね。天気も良かったし、結構釣れたし、みんな喜んでましたよ」

(来年のハゼも好調であるように) と、二人は祈った。

平成十年代の情景を思い出しながら

